



左から、チリのカベルネ・ソーヴィニヨンの最高峰のひとつ「ヴィニエド・チャドウィック」、カベルネ・ソーヴィニヨン、マルベック、プティ・ヴェルド、カルメネール、カベルネ・フランをアッサンブラージュした2016年の「セーニャ」、もうひとつのカベルネ・ソーヴィニヨンの聖地、アコンカグア・ヴァレーから、最良の区画のカベルネ・ソーヴィニヨンを中心にマルベック、プティ・ヴェルド、カルメネール、カベルネ・フランを加えた「ドン・マキシミアノ」の2016年。続いて、「ドン・マキシミアノ」とおなじく、エラスリスから、「ラス・ピサラス」のピノ・ノワールとシャルドネ。こちらは2017年が最新ヴィンテージ。



ファインワインに人生を捧げるエドゥアルド・チャドウィック氏。手にしているのは世界最良のカベルネ・ソーヴィニヨンの産地に数えられる、プエンテ・アルトのものを97%使用した「ヴィニエド・チャドウィック」の最新、2016年ヴィンテージ

## そのアイコンワインは チリのテロワールと静かな情熱から生まれる

今

年、世界的なワイン誌「デキャンター」のマン・オブ・ザ・イヤーに選ばれたエドゥアルド・チャドウィック氏。長年にわたるチリワインの品質向上、ファインワインを通じての地位の確立への尽力が評価されたものだが、気品と気さくさの両面を感じる微笑みの中で、常に情熱の炎を燃やし続けるチャドウィック氏にとっては、到達点ではなくあくまでも通過点ということになるのだろう。

今回の来日の目的は2つ。アイコンワインである「セーニャ」「ヴィニエド・チャドウィック」「ドン・マキシミアノ」の新しい2016年ヴィンテージと、最新のプロジェクトである「ラス・ピサラス」の一般へのお披露目がひとつ。もうひとつはカリフォルニアワインの実力を世に知らしめた「パリの審判」を主宰したスティーヴン・スバリユア氏との、ファインワインの今後を展望するマスタートーク「INTO THE FUTURE」開催だ。ビジネスとアカデミックなエデュケーションと対象的DRESSINGだが、共通するのは、チリのファインワインの歴史はまだ始まったばかりで、でも、その未来への歩みを止めてはいけないというメッセージ。

一般の方、というところに目を向けると、まだチリのファインワインの世界は知られていないとは言い難い状況だろう。チャドウィック氏は、日本におけるチリワインの歩みをよく知っている。「チリカベ」という日本ならではの言葉をそのまま使え、その裏側にある「チリワインは安い（けれどまあ美味い）カベルネ・ソーヴィニヨンだけ」というところまでとまってしまうイメージと現状もよく存知だ。

「日本でのチリワインの歴史は、バブルの時代があり、その後、フルーティで安いワインとして広まりシエアール位を獲得。今はサード・フェイズ・ピギニング。チリのテロワールをご理解いただき、ファインワインを分かち合う時が来ました」

チリのテロワールを理解する上で氏のワインは最適で最良のテキストだ。カルメネールやマルベックなど良質で多彩なブドウを育む本拠地であるアコンカグア・ヴァレーと、「ヴィニエド・チャドウィック」が生まれる世界に誇るカベルネ・ソーヴィニヨンの楽園であるマイボ・ヴァレー、さらに新しい可能性を求めた、冷涼な海岸沿いの丘陵に開かれた「ラス・ピサラス」を生むアコンカグアコスタでの挑戦。

「素晴らしいテロワールを生かして毎年、毎年、正しいチューニングしていく。2016年はチリのテロワールにとってはフィネスの年となりました。2015年ヴィンテージと2016年は気候に合わせて樽の使い方も変えましたし、セーニャについてはカルメネールの割合を21%から8%に大きく変更。来年にはまた変わるでしょう」。

チリにファインワインがある。これを世界に示したのが2004年、チャドウィック氏がしかけた「ベルリントンテイスティング」。以降日本を含めて世界の各都市で行われたが、ここでボルドー、スーパータスカンと呼ばれるイタリアの高級ワインとのブライントイスティングにおいて各地で1位を獲得。上位には常に氏のワインがあった。デイフェンディング王者としてのプレッシャーや今後の野心を聞くと、静かに微笑んでこう答えた。

「どこかと比べて優劣を決めたいわけではなく、ただ、チリにも素晴らしいファインワインがある。そのことを知っていただきたいのです」

氏のワインを通じてチリワインの今までのことを知り、これからの扉を開いてみる。きっと、チリだけではなく世界のファインワインのこれからも見えてくるだろう。